林業体験で伝えたい「林業家」という仕事

東京でたった一人の20代の林業家・田中惣一さんに聞く

西多摩郡檜原村に住む田中惣一さんは「東京でたった一人の20代の林業家」です。そして、本業の林業のかたわら、一人でも多くの人が山に関心を寄せてほしいと、東京都教育委員会や東京都環境局の施設で林業体験の技術指導員や講師もしています。田中惣一さんから、林業という仕事に対する思いと、林業体験を通して伝えたいことについてお聞きしました。

林業家になった経緯を聞かせてください。

家が代々続いている林業家だったということが一番大きな理由ですね。小さい時から父親から「山の仕事をやるんだ」と言われ続けてきましたから。そういうケースの場合、かえって反発してしまうことがよくあるようですが、自分の場合はわりとすんなりと後を継ごうという気持ちになりました。だから、大学進学でも迷わず林学科を専攻しました。農林水産業が厳しい現実の中にあることは重々承知していますが、忙しく飛び回っている父親の仕事ぶりを身近に見てきたので、林業というか第一次産業が自分にとって違和感がなかったんです。子どもの時にはそれほど意識してはいませんでしたが、父親が目をキラキラさせて仕事に向かう姿や苦労している姿をしっかり見ていたんでしょう。だから、逆に、まだまだ勉強することがある、身に付けなければならないことがたくさんあるぞ、という気概で林業を自分の仕事として考えられたのでしょう。体育会系（バレー歴15年）ですから体を動かすことが根っから好きだったということもありますけど(笑い)。

同世代が村から離れていく中で村に残るということへの抵抗はありませんでしたか。

それもなかったですね。高校時代、大学時代に少し檜原から離れていたので、逆に、無理して村から離れなくてもいいかな、という気持ちになっていました。外から客観的に村を見る機会が、村のことを肯定的に考えることにつながったのかもしれませんね。

それから、東京都の青年の家の事業等で林業体験をしたりすると、たくさんの人たちがウチにやって来ますよね。このことが結構刺激になっているんですよ。いろいろな価値観に出会えますから、そこで林業という仕事を多角的にとらえられるようになるし、仕事の面白さをどう見つけられるのか、モチベーションをどう上げていくのかと考えられるわけです。ある意味で勉強になりますね。

「林業体験」の指導を様々なところでされていますね。

今、主にかかわっているのは都府中青年の家が都民対象に行っている「森のワークキャンプ」と都環境局の「体験の森」(奥多摩町)での林業体験です。それぞれ、年間通して、植林、下草刈り、枝打ち、間伐など、一通りの体験メニューがあります。いろいろな人が参加しています。森の中でいやされたい人、道具を使いこなしてワザを身に付けたいという人、林業を通じて環境保全をしたいという人、中には林業を仕事にしたいという人もいます。

林業体験の指導をとおして後継者を育てたいという気持ちはありますか。

そこから後継者が育ってほしいとは思いますが、林業を専業にするというのはそう簡単なことではないですから、直接の目的にはしていませんし、それを期待したら林業体験に参加する人の幅は狭くなります。林業に興味を持ってほしい、理解してほしい、という気持ちでやっています。「日曜日に山に入って草刈をしてみた、空気が美味しい、いい汗流した、水が美味しかった」ということが林業という仕事を知ってもらうきっかけになるんです。どういう手入れをしながら木は育っていくのか、どんな技術が必要なのか、どんな危険があるのか等、体験すればすぐに理解できることも多くあるんです。

それから、環境保全と林業との関係、日本古来の「木の文化」を支える産業としての林業、多くの人の生活にとって林業という仕事は欠かせないんだということも理解してほしいですね。

実際、この20年くらいの間に、「林業体験」をきっかけにして、山や森林が持つお金には換えられない価値を再生しようとするグループがたくさん生まれています。すごく勇気づけられるし、こうした動きが林業を裾野で支えてくれて、林業を職業として目指す人が増えていくのではないかと思います。

田中さんが「林業体験」を通じて子どもたちに職業観を伝えるとしたらどんなことですか?

あえて言うならば、「仕事の厳しさ」と「仕事を支えているワザの大切さ」ということでしょうか。よく林業をさせてほしいという方がいらっしゃいます。ありがたいことですが、残念ながら長続きする人は少ない。仕事にするというのは、「作業して気持ちよかった」というだけじゃ続かない。それを支えるワザを身に付けないと身体がついていかないんです。

ワザは1年くらいじゃ身につかない。ある程度身につくまでが実に辛いわけですよ。林業という仕事は職人の世界ですから、ワザは先輩の仕事を見て真似をしていくしかない。もちろん教えてもらえる技術はあります。でも自分の身体でしっかりと掴まないとできるようにならないワザというものがある。木を一本トラックに載せる作業ひとつとっても、慣れなければ10倍の労力と時間が費やされることになります。

私自身、まだまだ親父や先輩にはかないませんからね（笑）。そこを乗り切るためには、仕事の先を読むこと、また、仕事の面白さを自分で見つけて、仕事に向かっていく気持ちを高めようとすることです。これはどんな仕事についても同じだろうと思います。

「磨き丸太」を見上げる田中惣一さん・自宅にて